



捜査一課が
敗けた

岩木草太郎

書き下ろし
長編推理小説

RIPPŪ NO

書下ろし長編推理小説

捜査一課が^ま敗けた

いわ き しょう た ろう
岩木章太郎



RIPPÛ NOVELS

『立風ノベルス』創刊にあたって

現代はミステリーに満ちています。

書下ろし長編推理小説をメインに、同時代に生きる人たちの興味と関心事にダイレクトに迫り、真にエンターテインメントに徹したミステリーを……。『立風ノベルス』のテーマです。シンボルマークの鳥は、ミストリーと呼んでください。

このシリーズを末長くご愛読いただき、またご意見やご希望など編集部までお寄せくださるよう、お願い申し上げます。

一九八八年九月

立風ノベルス編集部



書下ろし長編推理小説 捜査一課が敗れた^ま

著者 いわきしょうたろう
岩木章太郎

発行者 鎌倉 豊

発行所 株式会社立風書房

●141 東京都品川区東五反田3-6-18

☎東京(447)1191代

FAX 03(447)0173

振替 東京5-74493

印刷所 中央精版印刷株式会社

1989.11.30 初版

71720

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

© SHŌTARŌ IWAKI 1989 Printed in Japan

ISBN4-651-42021-4 C0295

目次

第一章	桜の記憶 一	9
第二章	ガラスの密室	11
第三章	それぞれの証言	56
第四章	名探偵は語らず	122
第五章	刑事たちの敗北	156
	大いなる誤解	199
	桜の記憶 二	211
解説	山前譲	220

桜の記憶 一

桜が、散り始めている。

次第に足早になる私の行く手を遮るように、薄紅色の花びらが舞った。しかし、私は逝く春の風情を解するには幼すぎたし、足を止めて短い花の命を惜しむゆとりもなかった。

この街は何度も来ているから、迷ったりする心配はない。川向こうの自宅までは、ここからなら子供の足でも十五分もあれば着くだろう。

しかし、陽の落ち方は意外な速さだった。仲の良い同級生の家を出た時は、まだ表通りが残照を受け

て橙色に染まっていたのが、いつの間にか、すれ違う通行人の顔もはつきりしないほど薄暗くなってきた。

本屋や駄菓子屋、金物屋などが並ぶ通りから、近道をしようと狭い路地に入ると、どこかの勝手口から煮物の匂いが漂ってきた。私は自分の家の台所を思い浮かべた。家を出る時、母親に行く先を言い忘れていたことに、今になって気が付いた。

心配性の母親は、ひとりっ子のいつになく遅い帰りに気を揉んでいるに違いない。私は再び大通りに出ると、一段と足を速めた。

その時だ。前からセカセカと歩いてきた中年の男が、右手のアパートに入ってしまった。曲がる時に横顔がチラリと見えた。私は驚いて、

「とうちゃん……」

思わず呟いていた。

間違いない。しかし、そんなはずはない。町内ではかなり大きい雑貨屋を経営する父親は、三日前か

ら商談で横浜に行っていて、あと二日は帰らない予定なのだ。今頃こんなところで見かけるわけがない。

私は、そのアパートを見た。木造の粗末な平屋建て。アパートというより、棟割長屋に近い。

父の入っていたのは一番手前の部屋で、扉には表札代わりに名刺ほどの大きさの紙が貼つてある。

細い奇麗な字で、知らない女の名前が書かれていた。

私は、立ち去る決心がつかないまま、アパートの前を行ったり来たりした。どこかで一瞬、女の叫び声のようなものを聞いたような気がしたが、それは、遠くから風に乗って聞こえてくる街の雑音のようにも思えた。

十分ほどたつたろうか。表通りの反対側で桜の本の陰に立っていた私の目が、アパートから出てきた男の姿を捉えた。紛れもない、それは父だった。そして、その凄まじい形相に私は思わず足が竦んだ。

口元を醜く歪め、目が異様にギラギラしている。

「殺氣」という言葉を、私はまだ実感として知らなかったが、父の顔にあるものは、後で思えばまさしくそれだった。父は、私の姿には気付かず、家とは反対の方向に大股に歩いていった。

私は、今見たことは母親にも言つてはいけなiconことなのだと直感的に判断した。そして数日後から自分と母親が身を置かされることになった修羅場において、その決心を貫いた。

春の夕闇の中に消えていくのを、桜吹雪の中から夢のような気持ちで見送った背中。それが、私にとつては父親の最後の姿となった……。

第一章 ガラスの密室

1

警視庁捜査一課の四角正義警部が、眠い目を擦りながら刑事部屋に入ってきたのは、三月二十九日の午前七時を少し回った頃である。

ある殺人事件の捜査で、前日の昼過ぎから夜まで参考人の一人の家を張り込み、交代要員が来てから警視庁に戻って仮眠した。帰庁後も会議が長引いたりして、二時間ほどしか寝ていない。

「畜生、眠いなあ。それに風邪気味だ。昨日の雨が効いたんだ」

昨日は、夕方まで細かい雨が降っていた。午後五時頃ようやくよく上がったが、下着まで濡れて寒い思いをした。

「おい、三上、何か載ってるのか」

夜勤明けで、朝刊各紙に目を通していた後輩の三上孝一刑事に声を掛ける。

「いやあ、今日はどの新聞もおとなしい内容です。夜討ちを掛けても、スミさんたちの口が固いもんだから、書くことが見当たらないんでしょう」

三上は、「スミさん」こと四角よりもちょうど十歳若い二十六歳。この二人は行動をとともにすることが多く、課内では「四三コンビ」で通っている。

「俺のそこへなんか、新聞記者は来ないよ。今度の事件は、さすがに先が見えてきた。俺が昨夜張り込んだ相手は、まずシロだ。やはり、鬼弦さんと吉木君の追ってるのが真犯人さ」

同僚の刑事の名を挙げて言う。鬼弦と吉木、この二人がまた有名な敏腕刑事で、これまでの実績からすれば四三コンビも敵わない。今度の事件で、捜査本部が最も怪しいと睨む男に鬼弦と吉木が張りつき、四角と三上は珍しく別々の行動をとることになったのも、そんな事情があるようだ。

刑事の世界もご多分に漏れず、互いの競争意識には激しいものがある。足の引つ張り合いや中傷も多く、おおげさに言えば権謀術数渦巻くといった感がなくもない。優秀な連中ほど、その傾向が強いようだ。

しかし、上級職試験を経ないノンキャリアにしては異例に近い昇進ぶりの四角警部だけは、人から悪く言われたことがない。どんなにつまらないと思われるような事件にも、手を抜くことを知らない誠実な人柄。割に合わないような仕事でも進んで引き受ける、いわば身に染みついた謙虚さ。階級の下を問わず、「スミさん」は周囲から好かれている。

ただ一つ、酒癖の悪さだけはどうしようもない。一昨年の夏、休暇中に訪れた群馬県・赤城山麓の恩師宅で、泥酔した晩に殺人事件に出くわし、すっかり面目を潰した。幸い、一緒にいた元同級生の協力を得て、無事解決に漕ぎつけたが、四角はそれ以来、好きな酒をキッパリ断った。

以前は楽しみにしていた晩酌をやめ、捜査一課の忘年会では、いくら奨められてもついに一滴も口にできなかった。この意志の強さもまた、四角が誰からも信頼される所以のようだ。

「今朝の新聞はおとなしいと言ったが、お前、今何か熱心に読んでなかったか」

「え？ ああ、これですか。尋ね人欄です。最近、同じのがよく出てるもんで気になって……。気が付いただけで三回目ですよ」

「どれどれ」

四角が覗くと、社会面の広告欄の右上隅に、

『平田勝美さん／あす午後一時、市ヶ谷の新都テレ

ビ玄関前あたりに来られたし。当方、面会の意味なし。心配無用／博道』

とある。四角は、

「ふーん。お前も成長著しいな。確かにこれは、かなり変わった広告だ。これを見て何か事件の臭いを嗅いだわけだ。三上刑事の直感が」

三上は、端整な顔に照れ笑いを浮かべて、

「そうでもないけど……この平田勝美という人と博道という人の関係はどうなってるんだろうと気になって……。『さん』付けで呼んでるところを見ると

肉親じゃなさそうだし、呼び出しておいて『面会の意味なし』というのが不思議でしょ。博道という人の意図がさっぱり分からない。新都テレビの玄関前という指定場所からすると、テレビ局の関係者みたいな印象を受けるけど、『玄関前あたり』というのがまたおかしい」

「なるほど。そりゃ……お前、確かに成長してるぞ。一見些細なことに疑問を持つ。うん、これは大事な

ことだ」

「スミさんはどう思います？」

「え……何が？」

「この広告ですよ。勝美と博道はどんな関係なのか。広告を出した博道の目的は何か」

「うーん。そうさなあ……、うん、そうだ、この二人はだな、昔の恋人同士」

「恋人……」

「勝美というのは若い女、かなり美人のような気がする」

「美人ねえ」

「まあ、いいじゃないか。捜査じゃないんだ。想像でいいこう、想像で。博道と勝美はだな、将来を契つた仲だった。しかし、やがて別れの朝が来る。二人は冷めた紅茶を飲み干し、白いドアを開いて、駅に続く小道を……」

「どっかで聞いたような……それにしても、刑事にしておくのが惜しい想像力だ」

「からかうな。その後、二人の連絡は途絶えたが、博道の方は勝美に未練がある。今どうしているのか、元氣な姿をひと目見たい」

「それでこの広告ですか。しかし、会うつもりはないというんでしょう」

「それはな、勝美は今や人妻かもしれない。簡単に会うわけにはいかないのさ」

「勉強になりました」

「お前、人のからかい方も成長したな」

「それはそうとスミさん、今朝は平穩なんだから、もうちょつと寝てきても……」

氣を利かせて三上が言いかけた時だ。

「通信指令室から成城！通信指令室から成城！」

課内の無線室から、切迫した声が急に飛び出した。「成城です、どうぞ」

成城警察署の宿直員が応じている。三上が話をやめて目に付いた紙を引き寄せ、メモを取ろうと構える。無線の聲の緊迫感に、四角も緊張して耳を傾け

た。

「一一〇番通報。成城署管内で変死事件発生。自宅のサニールームで、男が首から血を出して死んでいるというもの。自他殺不明。現場、世田谷区成城五の×の××、松本雄三方……」

「松本雄三？　おい、まさか……」

四角が思わず無線機に身を寄せた。

「……死亡者は俳優、松本雄三。三十七歳で独身。

状況、松本が自宅居間に隣接したサニールーム内で死んでいる。室内にナイフが落ちていた模様。発見者、松本宅家政婦・高木ヨシ五十九歳。本日午前七時五分頃、松本宅に出動したところ……」

ちょうど、宿直員の一人が起き出してきたのを見て、四角が大声で指示した。

「おい、殺しかも知れん！　仮眠してる奴を全部叩き起こせ！　俺と三上はひと足先に出る。死んだのは松本雄三だ、俳優の」

若い刑事は慌てて飛び出していった。四角は、三

上が走り書きしたメモから住所だけを自分の手帳に書き写すと、

「三上、もういい。その紙はここに置いてけがいい。行くぞ！」

部屋を飛び出す四角に、三上が続いた。覆面パトカーの助手席に四角、運転席に三上が乗り込む。早朝の霞が関の官庁街は、まだ人通りがあまりない。その静寂を、サイレンの音がつんざいた。

2

現場到着七時三十六分。成城署の制服警官が二人、松本宅の門前で右往左往している。この時間にしては野次馬の数が多い。通勤途中のサラリーマンのほか、まだパジャマ姿の老人や主婦も見える。

四角と三上が名乗りながら門を入ると、玄関から顔見知りの成城署刑事課長が出てくるところだった。

「おう、スミさん……」

海老原^{えびはら}といって、昨年の異動で警視庁捜査一課からここに来ていた。

「あ、エビさん。早いですね」

「はは、たまたま直だったんだ。スミさんも？」

「ええ。まあ泊まりというか夜勤というか」

海老原は顎で現場を示すと、先に立って導いた。玄関に向かって右側に回り込むと広い庭があり、入ってすぐ左側にしやれたサンルームがある。全体がガラス張りで、居間から張り出した恰好である。

「あれだ」

海老原が指さす先、サンルームのほぼ中央の床に、ナイトガウン姿の男が俯せに倒れているのが見えた。サンルームは、まだ誰も開けていないようだ。「中から鍵が掛かっている。外からサンルームには入れない状態だ。推理小説なら面白い密室物になるところだが、まあ自殺だろうなあ」

海老原は残念そうな口ぶりだ。

三上を外に残して、四角は家に入った。まず玄関

の広さに驚かされる。シャンデリアのあるロビーに百号近い立派な油絵が飾っており、厚い絨毯じゅうたんの敷かれた広い廊下が奥に続いている。

一番手前の、南に面した居間のドアは閉まっています、叩いてもびくともしない。やむなくいったん外へ出て、成城署員が割ったらしい窓から居間に入った。中には三人の署員がいて、今しもサンルームへ出るガラスの引き戸を開けようとしている。

四角は署員の一人に、

「サンルームに出入りできるのは、この一カ所だけですか」

振り向いた若い署員は、相手が名にし負う「殺しのスミさん」と知って、やや改まった口調で、

「はい、この居間からは、ここを開けないと入れません」

「外からは？」

「あそこに……」

と、署員はサンルーム越しに、庭に面した方のガ

ラス戸を指さして、

「これと同じ回転式の鍵が見えるでしょう。あれが開いていれば、外から出入りできるんです。しかし、死体発見時には鍵はロックされていました。もちろん、中からです」

このタイプの鍵は、オフィスでも住宅でもサッシ枠のドアや窓用としては最もありふれたものだろう。外からは開閉できるはずのないことは、考えなくても分かる。

「居間から入るこのガラス戸は？」

「これは、サンルーム側からは施錠せじようできないようです」

署員はガラス戸が開くのを確かめて、

「やはり鍵は掛かってませんね。しかし、居間のドアも窓も、内側からしっかり鍵が掛かってましたから、外部からサンルームに入る方法はないんです。

家政婦かきに訊いても居間の合鍵はないというので、我々は窓を破って入ったわけで」

「なるほど、完全な密室だ……」

反対側のガラス戸の向こうで、三上がサンルーム内を覗き込んでいるのが見える。彫りの深い、なかなかの二枚目である。顔だけで比べたら、生前の松本雄三にも負けないだろう。

ガラス戸が開けられた。二人の署員が、慎重に足を踏み入れる。鑑識課員が続いて入り、あらゆる角度から死体の写真を撮る。ひと区切りしたところで、サンルームには入らずに作業を見守っていた四角が声を掛けた。

「ちょっと、仏の顔を拝ませてくれないかなあ」

死者は、俯せに倒れていて顔がよく見えない。床は、大量に流れ出た血がドス黒く乾きかかっている。まるで、その部分に小豆色のマットでも敷いてあるように見える。

署員は松本雄三の頭を少し持ち上げて、顔が四角の方を向くようにした。

「おや……」

四角は不審を感じた。松本の特徴的な二重瞼の大きな目が、いっぱいに見開かれている。口は中途半端に開いているが、もっと大きく開いて何かを叫ぼうとする途中のような印象を受ける。

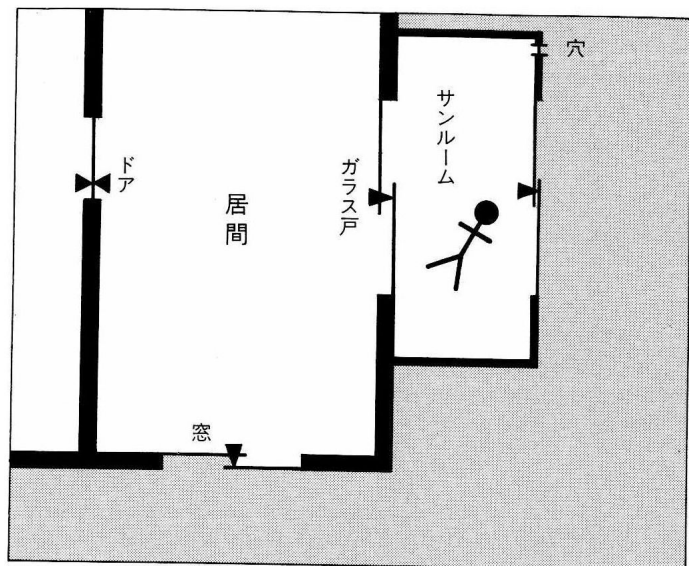
（こいつは、単純な自殺ではないのではないか）

四角は今、頭の中に、その疑問が初めてはつきりした形をもって浮かび上がるのを感じた。

どちらかといえば職人型の古い刑事気質の持ち主だが、勘には頼らないように心掛けている四角だ。しかし、死体をひと目見て自殺か他殺か、あるいは事故死かを見分けることにかけて、四角は警視庁内でも定評がある。

今、目前に転がっている無残な死体の表情を見て、四角がふと思ひ出したのは過去に扱った二つの変死体である。一つは、愛人とホテル通いしていた中小企業の社長が、相手から鉄製の花瓶で頭を殴り殺された事件。

もう一つは、ラッシュ時の駅のプラットホームか



ら線路に転落、入ってきた電車で轢かれて死んだサラリーマンで、実は並んで歩いていた同僚に突き落とされたもの。いずれも犯人は間もなく逮捕された。

この二つの死体の表情に共通するのは、まさかと思っていた相手の殺意に、死の瞬間に気付いたという点だ。もちろん、気付いてから死ぬまで多少時間がかかれば、こうはならない。『即死』が条件だ。

その場合、もし、被害者が事前に、相手の殺意に気付いていれば、殺される時の表情にどうしても恐怖や憎しみが現れる。相手を信用しきっていて、なぜ殺されるのか分からないからこそ、両事件の被害者には『驚き』の表情しか浮かんでいなかったのだ。

この種の殺人は、現場の状況によっては事故と区別しにくいものだ。現に、プラットホームの殺人などは雑踏に紛れて目撃者がいなかったため、四角が疑問を差し挟んでいなかったら自殺か事故として処理されるところだった。

松本雄三の死顔にあるものは、まさに『驚き』で

あった。しかもこの場合、現場の状況から事故ということはありえない。自殺でもなく、事故でもないならば、残るものは他殺しかない。

(しかし、この密室でどうやって……?)

四角はサンルームの中を見回しながら、急に目の前が暗くなるような気がした。

3

正午近くなつて、四角と三上は成城署へ行った。

成城の現場周辺はマスコミが殺到して大混雑になつたが、署内も、一階のフロアが報道陣でこつた返している。何十人もの新聞記者が、わがもの顔で机を占領し、てんでに電話で夕刊の原稿を読み込んでいた。大スターの変死事件だけに、どの顔も興奮して目が血走り、声が上ずっている。

もつと騒々しいのはテレビ局の連中だ。電話送稿の新聞記者たちを背景に入れて、レポーターが早口

で何かまくしたてている。急に番組を変更して、生中継に切り換えたのだらう。テレビカメラが何台も入り込み、あちこちで小ぜり合いが起きている。

四角の姿を目ざとく認めた新聞記者が一人、猛烈な勢いで駆け寄るのを見て、送稿中の他社の連中も電話を放り投げて飛んできた。四角と三上は、それを掻き分けながら慌てて二階の刑事課に避難する。

課内には、警視庁刑事部や成城署の幹部が頭を寄せ合っていた。刑事はまだ大半が現場や周辺の聞き込みに戻っている。署長も、署長室で報道陣につかまっているらしく、姿がない。今いるのは、四角たちには直属の上司にあたる警視庁捜査一課長の阿南勲、警視正はじめ機動捜査隊長、鑑識課長、それに成城署の海老原健太郎刑事課長らである。四角が入っていくと、阿南一課長が救世主を迎えるような表情で、

「お、スミさん。どうだ、どう思う? 直感でいい。殺しか、自殺か」

「それはまだ何とも言えませんよ。課長もご覧になったでしょう、現場。殺しはちよつと不可能に見えますがね、自殺にしちゃ引つ掛かるところもある……」

「それなんだよ。ま、殺しでなきやいいんだよ、我としちゃね。自殺なんてものは、どんな自殺でもどっかピンと来ない状況があるもんさ。普通の心理状態じゃないんだから。まあ、自殺でまず間違いないと思う。しかし遺書はなさそうだし、動機が今のところ皆目分らない。しかも大変な有名人ときている。ブンや連中が『ただの自殺』で納得してくれるかどうか……」

「現場は密室状態のようですが、居間のドアの鍵は出てきましたか」

「死体のポケットにあつたよ。殺しとは考えられない有力な根拠だ」

「検視の結果は？」

すると鑑識課長が、

「死亡推定時刻は昨夜八時から十時の間。今、解剖に回してるから、もう少し正確なところが分かるだろう。死因、これは見た通りだ。現場に落ちていた刃渡り十七センチの登山ナイフ。指紋も被害者のものと一致した。つまり松本雄三は自分であのナイフを持ち、自分の喉を突いたのに間違いないようだね」

「じゃ、自殺しかありませんね」

四角が言うと、阿南課長が救われたように、

「君もそう思うだろ？ そうなんだよ。だいたい人間が死ぬということはだな、まあ普通は病死、あるいは事故死、さもなきゃ自殺か他殺と、これしかないんだ。今回、ありえないのは病死と事故死。なんたってナイフがちゃんと落ちてるんだものな。残りの、自殺か他殺かを決めるのは物証と状況証拠だ。物証すなわち凶器と指紋。状況証拠すなわち他人には出入りのできなかったはずの現場。争つた形跡もなく、盗られた物もない。これらが示すものは結局、

自殺しかない。そうじゃないか？」

「待って下さい」

今まで黙っていた海老原刑事課長が口を挟んだ。

「あの状況じゃ自殺しないと、私も最初は思いましたよ。しかしスミさんに言われて気になったんですが、被害者のあの顔。あれは確かに自殺した人間のものじゃない。少なくとも、覚悟の自殺というのとは違います」

阿南一課長が、ちらりと四角の顔を見た。海老原は続けて、

「それと、もう一つ。あのサンルームは密室には違いないんですが、完全に密閉されているわけじゃありません」

何を言い出すのかと、全員が海老原の顔にげんそうな視線を送った。海老原はちよつと唇を舐めて、「庭に面して、ガラス戸の上の壁に四角い穴がありますね」

その穴は、天井に近い高さ二メートル二、三十セ

ンチの壁にあり、十数センチ四方の大きさだ。もちろん人間にはとても出入りできない。サンルームには空調設備が付いているが、それを付ける以前に換気扇があつたのを撤去したため、穴が残つたというのが、家政婦の高木ヨシの説明だった。

「エビさん、あんたまさか、誰か犯人がいてその穴から……」

阿南一課長が呆れたような声を出し、

「そりゃ、いくらなんでもあんまりだ。推理小説の読み過ぎだぜ。だいたいあんた、本庁にいた時から暇さえあれば推理小説だか探偵小説だかを夢中で読んでたもんなあ。密室トリックという奴か。そう言えば、俺も昔、外国の小説でそんなのを読んだことがあるぞ。確か、ドアのノブを取り外して穴を作り、中にいる人間を弓矢で殺すんだ。ほれ、何という作家だっけ、磐梯山じゃなくて……」

「ヴァン・ダインですか？ いや、その小説なら別の作家ですよ」